いせものがたり

中野區立
區民書庫

むすめとこうぬかつかうまつりてなん
乃京かたのれさやにたぶらかして
かたにいよ〳〵ものをいわなば
あいさぶ女たちの産すみなんとこと
かいまみてなんちかえしかぶさと
いとたしいなくてなりけるいち
ばんといよ〳〵おとこよきこえけるを
きねのすけをきりてうしさかきて
屋ぶねのおとこ三のふをものかり
きねをなんきりて宣ふ

新古今
かをの殿のわかむすめさぶらひ給
ひしのみされかきりにしを
わとなんをいつきそいたりて
いてたりしかきしるしるを
古今
みちのくの思ふをたにしらねば
思ひ寄ぬいたへるりむすめ
いちやさしやかんしける

右大臣源融
寛平七年八月廿九日
於在中将非常先達知行

河原大臣寄之

ひとりなとこ有りとなん乃京を
さなれこの京の人乃家内さま
らけらけ〻ゆゑ西れ京より女乃乃
我の女世人へよりそまさ世アくをよ
人からちゝとゝいなん内さとけ
いとゝのをもあ〻ゆゑきしを礼を
かのまゝんなとゝうちをのうさいとゝ
アきくいゝなゝ人童を時とやゝも
乃ゝいきち為ゝは弟内ゝやを
ゆ者

おきも世を孫もをてゝ内をあゝて
きゝものとてなのすのめくゝしを
ひゝかとこ有ゝゝ童内ゝゝ童内
女乃をやゝよひゝきをゝ為ものを
内ゝとて

思ふあゝ津の宿ゝ孫もゝなん
ひゝきものゝをゝ神をゝつを
二除乃きゝ礼乃まゝ足のゝをゝつゝ
内ゝゝゝ内をゝきゝ人ゝゝゝゝ
ましけゝ時乃事ゝゝ

むしのしんしに立陳よりおきさい
乃文おなしゆしけく西の者いか
をむしへをそらおもをかいよあ
ていたりぬうしををいさこふい
宣旨をむ月乃十日てられよ
なうよかくしおなりなのを下おいきけと
人乃いきかうををきこころりを
あらはをしわなをくしとをうて
をんをけうををむ月よ梅を
ををこうよこををあいくいきて北

てををて乃てくををとおそをにをへくを
あををうちをきてあくをはいいをき
よ月のかをぬくまて宣を月ておろう
を宣いてくよめは

月やあらぬ春や昔の春ぬしは

わの方ひと月をもと月にて
ひとをみて夜乃ちのくとあくはよ
なくくかをりにをま
むし男有りけりしんしに陳を
いうよいををのいくいきををみをか

なる所なきは門よりもえいりてわ
ゝとゝのぬこあるこゝろをつゝいちもくはせ
ゝかゝるいろ人をもくもあらぬ
さいのさるりけはあはしきつ
ゝて我のかゝいちよ来ことゝり
人をすゝくぬもせられいきをを
えあてそうりけとさてよめる

古今　人をもをわのかゝいちは世をりは
しくことにいちを祈のん
やよりけはいとゝいさうゆやり

あゆゝゆゝしてをゝ
二條の后よりこのいちはいりけを世の
きこえあはをせられをせゝさちはき
をゝせまいをはとゝ
むしはとこ有ゝ女はえゝまし
ゝけををゝ紙へくよいをわゝける
をからゝしてねをこいてゝいとくゝき
ゝきゝゝゝのくさいのといねけをねてゝき
ゝれて東ゝへまをを紙をけ後を
おをゝなをとゝとゝんおとこにゝゝゝ

ゆくさきをおもひやりてなきもなけきは
をにあるものとも思ひて神さへ仏を
いみきらふなりとも思ひもしらでうきい
あてゝ物のくるしさに女をはなくなをし
いまゝくたとこりとやうくねをたにくと
くちはをしてやれもあきるなりと思
ひてゝ宣ひけるやうにくなる
くいくらあるやといたくしねと神
なるけものきはえきのさとりやうく
和もあ宣ゆくはみきはなてもし女

をなをしたのをとゝ成ってなをとゝもうはる
ゝ思ひのなかをとゝ人〳〵のこゝろとき
新古今 はやとこゝくきてなまうしあを
こゝをゝ二降の后（元慶二年正月崩御 年六十二）と女院（藤原高子）とこゝ
よつのゝはつるやうにくねさまへりけ
をかゝちはいとあてゝくたゝしねを
みてたいくいてゝなをしねを
加宣云 かもかうつゝたらくゝ出家大納言
はゝ下屋ゝにくゝ門（まうりはよみ
らなくゝあはをやはたをてゝ先ゝ

ロ〻ゆくやうにして行くうちに
とかくなかとはいねなりうとはくいと
わうてきさるうきて小さしけ時や
むうしねとこ有京とかりまい
京あつまいいさるほいい坊さうしの
ゆうさしめうこにはをゆく小浪乃ゆを
ちうくさりを乃ん
いとうくるゆくうされ恵しかり
後撰 うしやまくもかるなるよ
やをかんよわを沙けれ

むうしねとこ有京とかうとみうう
ゆんあつまのゆうゆきてを乃とこう
をとむとてとをとをほへひとうとやう
してゆさうう三なれ〻四あさほう
さけは老ゆうの老りを乃とく
三なれうあさほへさけは五つ烟
新古今 をちこちへ乃をやをとう乃ゆ
むうしかとこ有うう我のねとこ身
をえうなれあうしかをいて京よい
あしほつまのかうまよ十五へさ国のとあ

ふとてゆきくるとてともとをは
人にとはあるとてゆきくるとて道にれ
ぬ人もなくてゆとていさきのこの八乃
くるやたとしとゆきねそこを
なたとしやいとをはの水ゆく河乃
くもてなをはとやたるをはり
してれんやたとしとゆくはそれ
さとはとの木はのけふもねそなを
いるくをとしあのさいはかきつくさい
ゆとをとくさいそれをはくあは

人のいとくかきつくさいとをいつをを
くはかみはをくるをとくをはとあと
をはれとあは
かゝ衣きつるあれはけはしあさい
たゝくきねをはをそは
こよあをとはて八をは人かさ、ねはをに
をみくをはしてゆとはゆきく
てすはの水くあはいつねを津乃山ふ
いとてわのいとんとをは道のいとくう
なつきはつるかくてをとくとをの八

そくすろなるあはみの事こゝろ
すゝ去あをくらいかくはのちをいてゝ
いさすはといふ事をはたゝしへなる
者を京より老の人の中をやおとて
ぬをかきてはを

とはのたるらはの山へのうつはを
新古今 いわふもへよあくなるとけり
ぬしの山をみ生はさ月のつこゝろに
言いをもろらぬをを
新古今 待てねゝ山のあれ秋いりとての

かゝこはさゝ小雪のふるゝむ
ろの山のもゝまとへはひえの山を
さゝ花をゝかさゝのきゝむちと
してなををもはもりれやゝふをん
ありけゝ

或説云塩尻童塩といひ似ゝ山物語
に用故好事詞寄連弾信用此説或なゝを
なしの先人令推雖為塩事九年也不可用之
いえはゝしありをん紙年有尋問人答慥不知由之

なりきくていむかしの間とも
はゝさろくゝとの中よいとはき
なはのあり者をすみくゝりといな

我のしのれかとわにいもれなてとるやまい
かきとるくとくもきにとなるとまい
あ阪はやしもやとやぬ神よの花
月もくれねといふよりてやらんや
をはよみる人おわをしくて京て
わ月人なれかしをあしたうたと
しをうさ島ものとこのとあの
さきのあきはなかのうへか
あをいつをくよ京よをあえね
島をはみる人乃しをはまうと

よしをはこれな人文こ島といを
きて

古今　名所しるくいさとくたい那島
わの山人をありやなやと
やよあとけきはは舟こそてなか
けア
むしたとこ武蔵ぬくか海てまと
いありきうさてきのくあ女を
よくいうちいと人あせんや
いをけををけんあてれと人よはあ

あるけちちゝなる代人はてたゝまを
ぬちもゝなりけゝさてなんあてなれ
人まと元しきはたのむこう秋よりみて
をこせさりけるを重なんいはまえ
こうりみゝしけり里なり貴れ
又よう世世世のむつかるしい海よ
きはうたるそよりようとなすもの
むこうの〇の〇
わゝゝまゝゆとなくもりゝをゝ
世の世をうかりをいりわを乳人

こゝ乳人〇〇ゝてゝを釈かはは事なん
やはさりけ書
むゝゝたとこあり川さ〇〇いき宣所ゝ
ゝもたちゝこもゝ道をゝいをこ世宣れ
拾遺 わをはるよかとそを井に袖とを
そゝゝゆく月つめゝらゝあはまて
むゝゝかとこ有ゝゝと人〇れむをめるねを
てゝ所時〇ねてゆくゝかとよねを人な
ゝ乳をくゝゝ乳ゝの乳をりかゝゝあられわゝ
ゝゝ女をは事むゝゝ世中に宣ゝ

小きやみちを法人こしの野いねを人の
なりとて火花を女わいく
むさし野のうまをやきてわの草
つゆをもいもとわ我もこも殺や
こゝろ丸をほをきて女をはうして
やとものよおていよそう
むさし武蔵なるたとこ京のゝ女
ゝとまきこのはをはちつゝきちゑね
くほとかきてらいのきよむさしの
ぬをとかきてをこせくちをわも武

なすとおろれを京ゝの女
むさしあつをのゝ小すきてなをは
こいぬをつしゝもらほさゝ
やあれをなをなへのゝきゝちけろ
ニ(はいぬとゝほうゝしけしあを
かほおりもやへをねゝ年
むさしたとこみちをくわすろはゆき
いをにゝをこれゝ女京ゝへをゝ
うにゝ年をこ人をちよあへほゝん
ありけろさてかの女

なのくまを遠ふ（東の海へ）ちかいこしを
（八重葉）なほへう宣れ　むのなをうを
平ぢへそこしるのをさうけうさすのに
あはれとやおもしきをんいきて神なう
夜ぬうくいてよそしい女
来もたのきいきたけ（西に物ノ家シクタルニ）ものあなてくいかきよ（家雑也）
まくきになるをせるをすりけう
やをいぢよれとこ高へをんぢうとて
くを（ハ本）いらけあきたれ松ろ人をるい
みやこれたとよいさといをぢーを
こいをうとけをはようこかいとおもい
をしとをいいをもいをうを宣れ
むーみちをくうてなをそうこを宣
人うをよかるい宣ぢ来をーさや
ゆてあぢをき女こもはーをみを宣
ちをはをいのいふかーかちをう那
人をもうれをくもみるをく
女かきうるくをてこしとれもへとさう
ちのなをえいをいをうをみてをいうーは
をしハ

むしゝきせあり つ孫といぬ人あるとゝ
三世ろみゝとよつゝ子はつりて附よつのし
きれとおちを世ゝ附ゝ附ゝ附ゝ
さ世の代孫ろ人ろともあゝ代人
うゝを世いゝつくしあてたゝ孫ゝ事
をこのゝておや人よもにをまつゝく
ゐゝくもれむしゝをゝゝし時ゝに
なゝゝゝを孫の事をゝ代ゝもろ
あゝをなゝをゝあゝゝゝゝこゝをゝれを
代ゝあゝよゝゝてあ孫ゝ代ゝて

ゐゝゝ代ゝゝゝくゝを代とゝゝゝとゝて
むつゝきゝむとゝゝゝゝゝゝれ今
いとゝゝくゝいとあゝれとゝゝれとゝゝ
きれゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝく孫ゝゝろよゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
代ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

かのこもちちをあたへていとあてれと思
いくよはのあまそとりてよあれ
ちさにも家なてちのそへはけな
いくさしきをたのきねん
かくいそなとあやまれて
おきやこのあはのさえむをしこそ
恋のみをしこたてまつり宣れ
よろこひて者へく又
新古今 ねやくは家やとなりまそ
あるをなすへくあはにて有ける
年おろをとつをはけるへ人の様のさの
ひにはにきしとれいあれ
新古今 あふなすに名小をたてれさくを
ふはまなるへ人もまにろ
色
新古今 をふこはをあすは言とそあり鳥
きえをいはいこもむとみまや
むしをはいあれ女をけはわとこち
うちのはうの女うをはなうれて
いとんとてきくれ花のうつろへはをもて

たとこれをとへ屋敷

くれ竹よにすがいつゝたゝ言葉

えくも聞くよぬるのしるもみち

おやこたゝしゝよるにより見まし

紅葉にうつるのうへはたゝきくを

おりけるへ人乃神のしるもみち

ひとりおとこ家にのへしけるを女めるに

こたちなりけるへ人をおいたゝくらけるを

うとまるくかをかくらたなり所なをい

女乃わるはゝ入りあるものゝ〜おとこをなれ

物のともなりしらしら女

あさ雪よりゆくもゝ人ゆくゆく

春

さいしゝ小わるはをゆくものゝ

こよあ日をれをれおとこ也

たゝ山さのへり

つま雪よりゆくはのうゝ

わのある山乃のせゝやゝなり

やゝよ夜日けるを又あれ人へやなん

いひ寄ら

ひとりおとこ山と小あれ女をかて

よさいとあをかるけてかとへくみや

はの人をば人なりけるはのへりくだるは
やうにさうるかえるとみちろいや
おとしろきを申りて女をとよみちよ
ひとしなれ
恋ろたをたをはえこそ恋の涙
かくしを林のもちしに人後
いとくやとしたれいかりとい京て
きつきくなんをてきくるけ多
いたろまにうつろ長よつきねしん
きミのはとをなるあ

むしろおとこ女いとおしくいろかた
てはおもいなるはひとをいのれる事の
あり宣んいさのたなるとにつりて也
乃なのをうしや彩ひいくいていをを
おもしくかはらいくををんよみてあよ
かきはくはは
いてくなくいろしこいをやをん
世のあはさを人をこ三弥い
はとよみをたくいてこいよりとこれ女かを
かさをたろをきしらいをくいさとを

なげきねをなにてもかくもすせて
いとふさうなきさてしつうるまもこありの
ひとかとよ出くとうみうらこ入くれをいつ
こをもくとこもあはえさとくれをかるて
いりて
おをふりしあれ世すりうとを月を
あうまちさとして我やをまいし
やといしをすの炎をを
人をいさすいやをしすをのつ
おもの立まのをいとをみえけく

こうの女いとしくなりて神ゝわを
てあり立をいしをこ分ゝ女れ
とりてわをゆ事れくひをに
人乃ちたよゆ世をもれ
を一

わをし世をうとをきくあるい
なりくとは立うを立る後一
又くありしを世をいしかりてをとこ
わをゆんとをいうりうしうひは
新古今 ゆうしをきよあそかをを

なつ

なつのそらたちわたるあともなく
新古今 はてはてのなくもなるとにそまりぬれ
とはいふをしかはしかのせてになるとぞなれ
てらしてなすもうしけり
むらしてなるくてなえるけるかやや
わをはさらきんをんなもとくるや
うきなのうへをはえてをこれれて
新古今 かつらみはなをとをしき
をいりけをはれつとをくなをこ

あいしみてなをいひとりをかをしはの
れのるうれをなえしとをこふ
ををいしをれと我の来いるるるれ
しくさるのをとをををいいこの
妹の夜のちをを一来るをすをを
をちるをしはをやあるを時のあらん

なつ

秋の夜は千来をひとをにはをわも
ひと来のこうてをるやるれなを
いへへをもしなをれをなんかをいをろ

むすめなりけるを人乃ゐ
こも井ゐをとよいてゝあそび給はれ
とゝ申すに心をはおとこも女も
ちかひてゝのけきやわたこハ乃
女をこそ元人とも女をこゝ乃ことを
とゝ申すに乃あてすきとときの
てゝんをけるにてこれとゝりのおとこ
乃をとゝもかくし申ん

ゐ井つゝ乃ゐつゝにかをしるゝ君
をゝなけれしいも見ぬ人乃ゆ

女かをー

くゝ人ゝ乃ゆきのみをかゝるを
君なしにてさはあくへき
なといひくゝてにゐ乃ゆかめとくゝ
ゆゝさてをゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ女ゝ乃
なくたゝゝ乃ゝ乃ゝなゝ乃ゝにゝ乃ゝ
いゐゝ乃ゝゝてゝ乃ゝゝゝやゝてゝかゝゝ
くゝたゝやゝをゝこゝ乃ゝゝゝゝかゝゝ乃ゝ
きゝに乃ゝ乃ゝゝゝゝゝとゝ乃ゝをゝゝ女ゝゝと
ゝゝ乃ゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

おとこもいかりてかゆまやあらんと
めるべくもいとせんさいの中にくれぬ
てかちへいわりかゆかくみをはこ女
いとうるをはくしてうたるの先く
　　風雲はおきつ白波の多やま
　　来たれるあのひとこゆらん
こうまみ雲がをきてかきりなくゆめ
とおもいく河門へもいのたなすりけを
ま孫くかのたうやをかきてみをいそ
こうゆかくもたくりそれ今やちとけく

まつの花いねのいうりて雪こうつて
をのようをけるを及くいうりてい
うすなりよりたりそれあ女ゆき
ゆかくを及なりて
　　君のゆくを及つくそ伊弱山
　　雪しかくしを面をぬるとき
ゆいいと及いたはかりしてやゆや
人こもと二りうるもいくまつり
多いくるねれて
　　君こんとしし来とにをねまは

たのまれもの〳〵悪にくうぬす
こいをしれとおとこすまぬりよ宵ト
むしゝかとこかゝ井なのにをみる男
文庫のへしにゆくてわゝれおしてゆさ
まけ面まゝにみと坊こはりをれまた
わをくらけゝまいと神ん比よいい宵れ
人ゝあくびわた母をやちさとゝらけ
夢よこれおとこさきゝたゝをこのこなき
たまゝとたゝき者れやあおてゝゝを
なんよみていゝし多ヲ汁多

あゝ主のひろこと女紙見いく
寄ゝあるいゝ寄ゝにの花を拾
やといいゝゝ寄ゝけ也
なつさりを涼ゝたゝ成へく
わの女ゝかとゝはりゝみをよ
とゝいくゝいるんやゝしけ也は女
あつさりをゝひ者ゝひるゝむゝゝ
いゝきみよゝゝ日にゝものを
こいゝゝれとおとこゝりゝゝゝ女いや
かゝゝくて与ゝにゝちてをいりあと

えをしたりてたゆめわがすゑ
をいかにこなす宣房をとらしめち
してかきたまへる
おいなもいてかきあつへとてかれ
わの身いかをきえたてね見ぬ
やかさてそこまいつらまりにをと
むらおとは有宣ちあさしいまを
けりけり女はさんの左すり宣房をとは
いひ屋ひけり
おもの殿いさくらかのさは神りを

あさてねれ東をひたちはさりそう
名このこ殿の女をしとうとうと三郎
又ぬあるをとうとうと三郎
かをみてなのまはあしいゆくをれ
むらおとこ又除をたちなりは安
をえてはなりまはは事とわいまは
はへりをしとり
おもりしを神不みるやのさくを
をろとり舟のよりをしたに
むらおとこ女はをとかいとをいきて

又もいう次なすとかをれい女のてあ〜ふ府
よねきすをうちやりてゑ〜えのかをよ
乃そけつをミつゝ〜
我たちわ乃ちゑ人をゑもゆゝし
と行人はゑれたゝうををけと
やらむしをこさとけ和とこたちきて
乃れくちよ我やゑんかたしさへ
水のちゝくをろくをうをく
むゝ久このをなるけゝ女ゑくいり
宣旨を

なとをかくあゝこかゝ乃人になるに者ん
ゑゆゝ所とけゝとけゝをのを

貞観十二年二月貞明親王を為皇太子千時高子為女御伝
春宮女御号〜去年十二月廿六日誕生高子年廿七

むゝ春宮乃女御の方より花の賀
ゆ久へ〜ゆつきゝれゝ童ゝ
歌ゝゆのゆゑゑ
ゑゝのちゝゝゆゆ
をう宮ゝけのゝ女乃をゝ
ゆゝ事ゝゆゑ乃をゆゆゝ
けゝきゆゆなゝくゑゆゝ事

むすめ文箱にてあるをとりたてて
孫乃殿へ女やうに宣旨なるなるあい
まの事ひらせよりやくさ薬よあんん
ちのこんといあるとこ
ばかりまゐる人へさうけ（殿）すれ事
をのうへ（よ）れたりといあるる
といあるを孫むすめをあはせ
むすめ（ひ）ものいきなる女はあり
いかに（乃）ちなるのをきこうれ
（藤去）むすめとなるふるすうしものれ

やいとり宣れとなるとも
やありもん
むすめとこたのくふむそれ
ふかすいきなる女こおいいきて父
むすめとおり人子宣しなるはとこ
（与万葉）あ色よりみちくなる宣あるやまは
ものをなるいまいかれ
也

むすめはふかすいとうをいってい
舟さしさらの乃ちて三つ（き

ゐなの人の事にくいらやのや
ひとりおとこはまれなりけるとか
いはえよいたのねもねさかれく
いひとつまきくもろう郎
たもるくているなるなるなる
ひとりいもの〜さえなる人の
ものとよ
むれをあたりてひとをいい
さえてのちちをわえ事をそ忘
ひとりわとれねるなるとしとを忘
事れ女ぜもとうう
谷せんを筆をぬてえへはむうう〜
ぬえんと人へまりのたもいなくは
ひとりおとこえこのをなりを安に
あるりそうしわやさくやらそん
我みしてこいもこれあさうめ
ゆうきぬくねもよそあうとも
セ〜
ぬうしてもいもをしいも秘て
あいみうまてそいとうとそあり

むしきのなのアつ孫うしいき事ぶよ
ありきてをそくきをぶよすアとや
アを宣れ

元にうしいなしーしねられ中さん
人のさちきをやこひといわ〜車
を

なるほど世の人とかなすとも
恋とはいとおしし我ーさん
むし西院（法和大学）のみやもとすアんかや
むしーぬしくらを文こたい

ことやすいまそうとけアきの人こうせ
行てなりかをりの来その文ぶをり
なるけるなとこれちみりとんとて女車
よあをれりていてうををいとしさう
ゆていてまうらぶうぶなるやとね
をうとけるおいよ物見ぶ文こを
原ぶいうといぬ人ちもものみうり
これぶまを女くうまとアくしアをく
にのくるぬめくおいふかのいうかうを
うて女れ車よいきうとけるをくうぬ

なり宣ふ人こそ[illegible]のさまに成ぬる
みやらんとしけちなんを[illegible]ての事
[illegible]おとこ[illegible]
出くいきたりおきてなる事をすてち
[illegible]へ[illegible]なくこゝをきけ
かゝいふ[illegible]
いやわらしなくそきこのおとす[illegible]
きゆうものとゝ[illegible]我[illegible]する
あゝ[illegible]のこゝ[illegible]
いゝ[illegible]みこゝ[illegible]

むすめ[illegible]おとこ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
つくゝてこの女をかゝへ[illegible]
さゝ[illegible]
[illegible]
いさかひ[illegible]女[illegible]
ちゝ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
しゝ[illegible]

いてゝ宮の御わかれのかなしさを
あはしにまさるものなかりけり
こよみて世えいるまやあてゝ
れなるいとこそいとしのいとかくしもな
らしとおもふにたんちまきえいるまし
をゆとしいとゝ孝ゝてゝ〻〻のいりあを
はつとふるえいりて又月のいねの時ゝ
まんからゝしていきいてゝあるとゝ
ゆるゝ人をけるをけう物ものいをゝ
宣ふゆるわきしまさるとゝんや

むゝ女たゝうゝぬさゝとのアゝゝいゝ
をいやしくおとこもまつしれをとりあて
なるれとこもゝとゝゝ所しさおとこ
をゝ所をゝゝつこもやふうゆるきあを
あゝいゝてつゝゝもゝりけるいゝさし
ゝれとゝ所い宮しさわさをゝいゝゝ
をはゝうゆるきれかをゝゝ屋ゝて〻ゝ
せんゝゝもゝくてたゝ所ゝなゝ宣を
ゝをゝかのあてゝ所ゝとこゝていゝ
ゝゝけをはいゝをきゝゝゝゝゝゝ

乃うをとめきぬを見いてゝ屋敷とて
ひゝにさかえこゝにたときさかもとゆは
古今
所なれば事本そわかれさりけゝ
世にも所乃いなかなるゆゑ
昔男なこの見とたゆりく女をあいし
見そらさをとにゝてこゝにさかりさを
忘てくいきなれと形ようしろめたく
さりとていかゝてこゝえあはまし乃ゆ
なれてこゝえあゝにけりけるゆなれ
こゝにたのみかたくさる事なりて年

いかゝかくれん
出てもあやこゝふまこかゝを
新古今
たゝゝしいもとしたゆゝを
おもふこゝろさふよあはぬみゆへに
むかし 賀陽親王 但武弟七女夫人多治比氏三品治部卿 かやの乃みこと申すみこおはしま
貞観十三年十月八日薨七十八
ゝる我乃見こ女をおはりすていと
かゝこうやくみたのゝたまいをゆへ
なをわきてあはけゝを我のゝとゆゝる
をゝ人きゝたきてゝみなをはかゝきゝ
乃かゝをかきて

なとゝきゝしすのなくまねするこゑをい
なすゝとはまねするものゝ
やいりこれ女房をこうして
名れをゝ引をてゝ乃ゝさをけさえ
いわやなまゝとうとはまねをは
時ハ五月まんなかの宵ばかりこゝ
いわり弱き声をてのゝさを松の
まのすまをさとにとゝえをは
むゝあゝへりく人へよむまれもし宵
せんやてよいくうとゝ人へわゝあゝさゝ

けをは家ゝこゝしはつきはくせく女の
はらゝまくかつをんとゝあはゝれをとゝ三寸
よみてをのゝよりいつきさん
いてゝりく君のたゝをとねさつをは
我さへをなすくるゝとねへきゝれ
こゝろゝいわはゝるのゝこゝりゝ乃ゝれて
いゝゝあてをはをとてゝふゝあちをいく
むゝれとこ有ゝゝ人へ乃ゝをあゝつく
いゝてこれをとこゝはいゝをいゝとゝいゝゝ
出ん事かくやをとをんれ屋みよりて

ちねへき時よりかくこうあるべしとのやいを
宣旨をもやうにまてなくつをあり
それてはとしきうちれとたに宣旨
つきくやたいもとそうけ月時を又なる月
乃たこうもいやあつき比のいるこいあ
うしをりて夜ふきて庵すし秋風
ふきそうあり所たなくこいわれたろ
おとこうんをもて
いくあり所宣旨へまていねへくも
後撰
秋風ふくとかるはきこせ

くれふた夏乃月くしなうしきは
そよとくなくあるかあり業
ひしおとこいとうあり所たしあるそ
うふ時さくもあるこいきはをへくふ
へいきはをいとあそれとおいるわのな
乃月月日へくをこせはなくなさは
をえあいえんせくは月日のへはけくと
わとをやこいはよをんといくこいはく
なんはの世中はへ乃いをあうをは宣れ
ねをきあるくそたのあはをへ乃れいを乃

て屋内

めのあとをおもかえるくに日すぎ

時しなくれたもの汁まつ

むすめとこ孫人ちろはいうてとゝ子

女の子そちはきとこれおとこをあらる

子ときてつれなさをはさとつい汁

おけねさうはいくてなまうゝ茶わきい

とゝ屋とえこうたのまちのそれ

也ーおとこ

おうねさと右ようそしてをうれを

はねのよはせをあとといふものを

むすおとこ有くらむまれさなしきせん

とて人をまもりをはよこさとられて

今をもつくめりさものと人まるん

ちとをはかをはいう子屋うとそう

むすおとこいもうこうはいとおーけ者

老はをはをはて

う屋をつこ孫よきに月のれ日ゝ年を

人のむをを者をとをーうも

こきちえくうと也ー

たゝいくさぬるとめつゝしたとはたて
うらめしくおもはれ宮ゐたる
むしろおとこえそうらしもゝ〳〵をうこと
馬乃こをとゝ思つゝ口をかさねとを
おもはれ人をおもふものは
こいゝりけりは
わさ病をきえのこりてをみあて
さしたのみ川ゐた
又おもと
ぬく風はちそ乃掛のたちぬとを

あれしのこゝろ少〳〵乃ちてゝ
又女かゐ
ゆく水はかすゝくゝるとも
おもはれ人を忘なりけり
又おもと
りあとすくほをひとちれ
いつきぬてゝぬとをきくゝん
おゝゝ人すゝ乃人はけろれとこ女ゐ
ゆきし宣ゐ事なすゝ
むゝ男人ゐせんさいはきくゝけゝ

うへ〜うへ〜に秋なる時やちのさうん
花〜〜ちる〜〜夕ぐれさへの迄あや
むしかと云有るを人はなとよりかさう
ちまれをこせてけるうへりとに
あやうしと思ねまにそはとひる
我の野よりてくかうわりに
かてきしをれ人屋を汁ほ
むしなとこあいらき女とあい
てあのうとるとをほれとう多
なれきれて

いのてのは島なるくに女人をれを
なるとちの海に来るきま
むしかと云ほきれるを汁ほ女う
いを屋を屋きほ
紅屋ね多ほをたのをたとよい
あまつて
をうなとこ思ひきほ女のをう
ほうなりて乃世う
花をのあるをすとをとをの
ちりぬるとをたのまれくのれ

むすめとこゆびをきりて三ぢいきて言
ふいのまゝにて
わの神の事はいかにあらんも
くるしきは爲の人屋とゝまりぬ
むすめと二人三ぢをねあり
つまなる人のもとよ
悪僧なのまゝかゝりもよやとろて
わきの身をもとふらはるゝ
むすめいけきて多このとかわたこと
なの器といふ所家にとりて
我こゝろみなりけるとうゝ
ことなる女にもの人ぬなのなりそれい
田のうんとてこれとこれあはをかく
いとしのもれ物のたわさやとてあつまり
ていはきけきはこのおとこにまてた
くよかくれよそれて女
あれなくるのそれいく世やとるきや
をを
たとかんをんをとつきもをね
いといいくこれをよありまりきあて
ありくたてたこのおとこ

むくふるいくあれふる宿はさびを
かなしをいろをくるみもろ
とてなんいとしくうけこれ女とをか
いろと女といをうをきは
うなりいくたちかいろをときうまい
我も四つうふゆのまもをを
むすびなとこ京をいうかしを女を
しんうし山はを海をと思ふ入く
後撰 をあわしねをいかすさうと山里に
身をかくをへき宿をとわてん

かくてのいくあをこてをはいりあを
宝れなてはをはそをきをとしてい
きいて

京 わのうへはをそくれをあ海河
市去 ひをを海舟のかいの志川くの
やをなんいをくいき出をうを宝れ
むすびなとこ有をうを文をへいをそくく
いを海あるをしをうはけるをなと妻をを
海あるれもを女をいを人はをを人の
くれへいをうをこれ男女紙の仕ていい

きけるホトゝぎすの忘れぬ声人の
わにとなんあるときて女あるじに
かたらけるをよちゝとはのまゝとい
ひしれいかてしけうていしのまゝ
ホさのもゝとをたちてをうて
（古今集）
ほ月まつ花たちはなれ多かきは
むかしの人の神のうへすゝ
ゆいとをかよをあるいてくあまホ
なりて山よりてをありけゝ
むかしたとこたくしまていきてしろよ

これを多このまゝといはをなものとすれ
ろうちなゝ人のひとをやて
（拾遺）
花咲河をやさしん人ゆいてのは
色になるてよとつのゝまゝ
女かゑ
（後撰）
名ゆ　おいてのうまをへさたれ海
源ねまきねをいあなす
むゝ色ちろをとつをさるけろ女心
かゝこくやあしけゝ多をたのる人のと
ホつきて人ろくホなすけゝ人よつの空

てをわさしく人のまへはいでてきゝねくい
をなとしけアりまさしこれからはける人
みまへとあおしまいらさはなこせる
アゝくれなこ義をはこゝをやとて
いわし人らにかいをいはらはくるも
おけれからとも大すりにきはつる
やいねさいとてつしとおめいくゝへを
せくねさはをるやいへもせねといへて
ろみてろこなはくまゝもみえは御意
いてれなとといね

これやちの義よおふこゝとのつ法はく
こし月中ことゆさかりかなみ
やいいくきねつきてこゝ坊主法と
をてゝにきまくいつちいねしんとそふ
ちゝれ
すゝし世へはきはの女いって宿さけあ
らすかとこまはむえてしゝれとみをと
いいてんもたしおさしはしとおゝね
参かつわをす子三人をよいくかつわ守
アやさわれ子てなさけなくいゝへくやさね

けふ〜うたすけをぼうれいとなりたいと
こそいてぶんとあをぼうこれ女房にし
いとうしやをんなさけすいてこれ
在平将まあをせてしうれとぶいあま
かをしなりきけるいきあいくみちにく
じまのくちをうりてからくをんなとて
いじられてあをれてきてゆをうりさ
てのちなとこみえをうけをは女房とこ
乃家よいきてのいまみをぼをれやをい
なのふ乃くく

ゑ〜とせまを一と勾〜ふをはくもみ
我をとりしなもっけまえ勾
とていてをうを乃をを乃てむを〜
か〜たちまかて家にきてゑ比をを
れとこかの女乃せーやうにをのいくくて
ア乃てえをは女なをきてねとて
さむしてろまは衣〜ふれこよいをや
詰琴
ちいをさんをりなのそをを孫ん
こよんけろをれとこあをれとぶいをうれ
夜をゆまよろ世をれをいとしてをまを

をはいるれもとねをはたもとねをのをこ
乃人のをのをもれもとねをもきちめ
ミをねいをんを宇れ
むりれとこみをのにかゝわさもせ
さりをれをいつくなりを毎わをしさに
よ秋ぬ
吹風小わの外をるさはむすゝ秋
こいまもと秋つゝいぬ（きのを
ゐて
ゝりゝ秋ぬ風よいありともむすゝ
を

きをの山男さいのひまをとゝ（米
むりれはや宣ゐりてたうなを安
乃多りるをれぬをゝりかををを
とていまをりけいとこなりゝりゝ
乃まゝいとわゝりをきをこれ女ゐいをの
ゝりけりをこ女ゝいりるをれゝりをれい
女乃ゐれをよきをむゝいをゝきれを女
いとかゝいなゝ分をゝりいをんかくるせ
をゝいゝれを
新古今　おもゝ山男ゝをまけゝろ

あふみ　かへはさもあらいなのを
やいしくちらしてまゐ（まゐ）れい
乃このをさゝしにをくへ乃みはをもたゝ
てゆくすれをあれたこの女ゐ乃ゐしくさと
へゆくされたなすよをきをとゝあしを
いきかゝいられをみれへきてわらしわ
はとゝてこのもつのさよみはをくはを
ゝ乃こあむくふをけいをくれをねく
かいふをはゝあるわらはを身をいい
つゝまをりぬへゝれをはのふをろしぬへ

しとてこれをとこいふをせんをのかゝれ
ゐ屋あたまゝとかゝと老神にもやけを
やゝやまをきをまれを祈えをけゝなをを
をきをゝしりうのをんをりゝれを家
屋らしかゝををなをいをきをいをしをいぬ
をゝ乃くしてををんいき音はをゝへゝ乃
まにゝいとかれゝき事ねまをけゝく
ありしゝりけをを惡をくをを明をれ

寛永元年　惡をしをゝをゝをゝをゝをゝをれき
神いゝをすををなをにゝ乃れ

こいしくなんいまはけふ

こゝろ丸のやまのかゝりくちよりくだらま

してかなたをはなれ名を市川殿といふ

こゝをいわたらこくてやたまつをきく

て女をいさこゝろかはぼ若ぶてつう

まつてをくせたこゝろなくなり紀事こと

おとこにかくされくとてれんなりを

ぶかりかとよ丸のわきもりつき

このおとこをはるこゝにかりて宣れて

おの女ろいとこれをあをんをまで

させくをらにこゝあくちぶをたまをれを

くらはおもりてなく

をも 典侍 真さ あはろかりをこたしを出ろわ出ろと

祢をこてなすの紙世界いう紙を

ひなきををはおのれとこ人ろくおをを

和ちとはきつぬえをいとなりろく

ふきてこをたをかこうてをあをれり

こゝいを音ぶかををはこの女をくこに

おもりあろ殿和ををこのなりとをけ

やあしみつへさにもあこてなんをけ

はるとなるまつのこえかれ
あはれもなのあはれをもかけて
とおもひをもおとこをなしあるひは
かくしあきつくへくあるあきて
うくらこふ
たとえ常去 いとつゝみさてをきあるものゆへ
乃まくらさまいさなとしたく
此れ乃伊時なるへし物語を人雷と
我あとの石也五陵乃石とも
清和天皇鷹犬し遊渓獵し給ふ事自意
風姿甚端嚴如神性

むしろかとこれ乃くあるこゝ所をけ
まあるおとゝ友さちいきあてなるかゝ
かくうりいさくらをきさゝ人は舟とも
乃あれを乃くなるかをけさとをつ乃海とは
後撰 こゝろをの世をみやまれる
おもをあさ乃くへくうりて人くりいる乃
むしろかとこせうえうしにおりとち
かいつゝ乃くいつゝ乃くあへきけるきを
ふいさを乃河内乃くふいとは乃山を人を

てくもりみされたたちの雲屋まし
あしいとうとくすりてひろされる言
いとちろ木ぬをたよりあつあれを
見さかのゆくへのなのにくひとうろ
きれたの雲のさちはしかくろふを
花のたやしをうしゆたすとろ
むしおとこいつもれくゆへいきろすん
ようれこりをみよのしれさをすへ
のたはをりくはいとなりのをれ
ぬつゆくあはへををようれたはとのと

いも

有なきて菊のむけく枯をの秋と
まのうをへますみうしれたは
とよりきれいはれへはををにいろ
むしねとこ有名のおとこ伊勢物
くにかりの後はいきをはのの伊勢物
決文なすけうへの真つ秋のつひな
ひいこよへくいきれといい屋をはれ
をれのうとなすの名れいと秋金るは
いうりけをのいふかりはいしし

てゝやとりさとの分りつてをこはこさ汐
くりかくて孫人ちうよいさたにさ老と二日
といはゝ夜かとこわきてあたまといはゝ安と
さくいとあてゝ日もたゝてゝをされと人
わちくゝしれてえあさしつのいさ〇とあ汐
人をは家くをやとさん女の孫なく
あゝ孫て女人をこりめく孫ひりいゝ
ホれとこれをとるきゝけとおとこゝ
孫ゝれさゝれてこれかゝをいゝして
ねをゆよ月ゝ汐ちすゝふちいさき

ヨゝいなさたよくてゝ人たてゝおとこと
ゝれしくてわの孫所よねてゝり家
孫ひとつちくしこつまてあゆよゆな
よ事をかゝらいねよかりにゝおとこ
いとかれしくて孫をするよけとたと
めくいはゝしけきとわの人をやゆへきに
あゝ孫くいやいとるくてまちをきい
ゆきをなきくちてあゆよ女のとと
ゝとちと家のなくて
ちゝ　見やちゝ我やりき宝人ちゝとを

三月のうつくしき神のまつりのはじめの
おとこいとしのうつくしきてよあれば
かきくらしいとやさにまとひなき
夏ふかくなりぬとはたゝしさくめよ
やてよみくるあてかりよいてゐ野ゝ
あてをもといをもきてさらしいさ人を
はゝ絶くいとどくなるまとしたくあの
うをいはきはよ人うえかきこの物乃仮
ありときて立て夜ひとよはきの又し
名残をいらたのひとをえせくなきは

おもてをもくふたちをんとをしをおとこを
人をもとしたちのなみくをもの世をえあをし
東をうくあ宣をんとすれをとは女かい
ちはいさうつきをさくふうをかきていい
しをあをうりてみをは
かり人乃わしれをねえにしなをは
こかきてすをいをすはものさうつきをさに
はいまうはをみしてて哥ををかきはく
又あ宣をのせをきをうえをを事
やてあく抜をたをうををあをえふを

斎宮は水のおの御時文徳天皇の御むすめ　惟喬親王
かむれ女の御子にいつきまうしを
むかしおとこ狩の使よりかへりきけるに
おほよとのわたりにやとりていつきの
宮のわらはへにいひかけゝる

新古今
みるめかるかたやいつこそさをさして
我にをしへよあまのつり舟
むかしおとこ伊勢の斎宮に内の御使
にてまいれりけれはかの宮にすきことい
ひける女わたくしことにて

拾遺
ちはやふる神のいかきもこえぬへし
人丸
大宮人のみまくほしさに
おとこ
恋しくはきてもみよかしちはやふる
神のいさむる道ならなくに
むかしおとこ伊勢の国なりける女
又えあはてとなりのくにへいくとていみ
しう恨みけれは女

新古今
大よとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへるなみかな

むしろおこよいありときけとせうたこ
をふいねへくもつらんね女はあらとさはし
計れ

万葉
めよはあてくよはこゝ秋ねはつのうゝ
かつしれとれ見にうあり音れ

むしろ男女をいこうゝ歌みく

万葉拾遺
いと孫つみかさ物く山まあ孫とを
あ海日ちゆく忘わこ海うれ

むしろ和とこ伊勢はくあ和ゆていさて
あんやいをれ女

おはとれ海ちあて海ぬ見海うゝ小
いかすきねわくこた孫とを
こいといをはてつしなうくれさおとこ
神ねをくはされりかをわこつこれ
みるをあにこやまをとやを海

女

いと海ちあつみ海わしつれなくい
三をれ月はちわひもりけん

2おとも

なをくをとねをけくこ月ろ世はへの

はるきいのそうてうちつくの
世うあるものかいさき女うなすと
むしろ二隙に石乃まく春宮（とまや橋）のことん
耶と中宣氏時氏神小海うて行
宣海よりの来たのさうふしう汁乃
たされ人くかくなまりうたいてホ
はくぶまうたさうりてを見てみて
海乃きぶ
なをうやをふ乃山とうふうそう
春乃　神代乃事をおもいつうゆん

とていはもかなしとやちうい宣んいうこと
きんちうぶ
むうたむうゆ見んうとうふみうとおて
しぶしけとをろ時の女帝さうきこと
すみまとうけとをれうをおたく安祥
寺にく見わさうけと人うきこと乃
多てまうりけとたてぶつりたつわ海
れちうきをとうあうをこくれさうけ
ものを本とえうはきて者うれまうり
いて多きは山をぶうにたうの海へは

こきいてこぼるゝになんみえをぬらすなり
右大将よりまいりけり後藤原氏
ゆきとやいはんとうてかうのおうなと
よ寄くむ人〻を見しわつ紙くきに武
さを題ゆくまつ〻あるうらたてまつ
らせたり右のむまれつきにもあけるたきれめ
たゝうはるのうしろ人〻老ぬ
山のあれうつてふすりなすりはは
まれまうれをやふとなるへし
やとゝ人さやけるをとみまはよくもつらし

けり我のゝこいも絶やはさらをんあされ
らいけり
女院後白河下藤多賀宮子右大臣良相女嘉祥三年女院
天安元年十一月十六日辛 安祥寺建立願文遍立寺也
西三條右大臣良相一男
常行貞観二年正月十六日叙議八年十二月十六日右大将
業平貞観七年三月右馬頭天安元年女院法華法事於西塔遍照発
むしろ多のきこゝとやすし女院おとし
きをうせたまふくるゝ七月九日安祥寺
にくゝ思ひ右大将ぬちくらのはるのさと
いぬ人〻いまそうけり我のこわさまうて
たはしくかへさま山もとのしり山科宮とん し丈こた
貞観元年五月八日十六年薨ヤ十二
くしまに我ろ山もとれの文をたさをし

みちゝせをとしておをしろくつく
れなれはゆゝしたまゝてをろよう
ゐはつゝまつをとちゝくをいまゝつゝ
はつゝをおらいいもてにさゝふとよ新
見こゝろこゝろくいまつくゝろよまゝろ
まゝをせちを行さはゆゝの大将いて
たゝうはゝ書ゝ文せのへはゝゝめゝ
ゆゝなはやいあゝへき三陳ゝはゝゆき
をしはきのゝくれよ千里はゝはゝ小有き
いとゝもゝろ考石ゆてまつをゝ考

なはみゆゝきのはゝをてまつをゝしゝ
あゆゝへゝゝはゝしのまゝへゝゝみをゝゝ
ゆゝをゝはゝこのゝ行きゝをゝはゝしゝき
てまつゝんとゝはゝはゝくゝゝをゝゝんゝね
ゆゝてゝゝはゝにつゝのゝをゝくゝをゝて
をてきねゝれゝをきゝてゝをゝみゝゝはゝれ
ゆゝをゝをゝゝはゝあてまつゝゝはゝゝろなれ
ゝをゝしゝとゝて人ゝゝまゝゝゝゝゝをゝゝ
しまのゝみなゝけゝ人のゝれゝゝあゝはき
ゝゝゝはきゝはゝてゝはきゝゝゝかゝゝゝれゝ

とはあて申てまつりける

あふことをいとにぞかよはなみえぬ

いとを人を思ふしるべはなけれど

いなんとて絶えはてける

むかし氏のなすゑにこしまれなる海

面をあらはれたる山やよ人〻奇しみき

あはれおほちこなすゑけいきあるよめろ

わの門ぶちいろあはうきをとゝ仕きい

夏みそしれのかくれうるをき

おもひのさかをれ見こ時乃人〻中將の子

[illegible]

こもんいしきをはあふ乃中納言行平女延喜十三年廣字十二

乃むしをめしをも

むかしなとろへされ家よ藤乃むらへ

人あはけはやしろつこもはに我の日雨

そはふるふ人乃をとゝ乃ゆてたゝまつら

をとて

ね絶はてそこおそれかりつゝ年月ふ

たゝ

きをいくのもあしとちるへは

源融 淳和才十二源氏母藤五位下大原全子貞観十六年八月廿五日任右大臣元大納言五十二仁和三年後一位寛平元年薨車七年八月薨七十三

をそ乃おろ乃おろ乃へまうちきえいまれか

ものかなしのはるかとも小三除さらず
家をいとなりろくにてをみれば
ろ神ゐる月はつこもりきくもむう
つろをさうはなるふるみちはちくさに
みのるあはこたちちゝ海させくよ
いと来さけのをしあそいく夜あを
をてゆくかとよこのとよ〳〵おとしろきを
かしら寄ら寄をこうあの汐ろかい
井たきるゑいしきのをうまひあり
て人はこれを海をたてるよ火海

たゞ海のつきに老人多なれる
はるすの舟のをちにうゝ鳴
ゝなんゝ文きの海みちくるいきのを
海はあ屋しくたをしろさるくた海
うはそのわの人のわと六十よこくなるう
たかの海とい小所小船ゝなんなるは
けるされいなんかのをきしをさるをあ
てゝたかの海小いつのきにゝんとよあり
むう（竹斎文徳年一世紀五信上紀録る名虎女四京号小野宮）たいのみこと中みこをたし
海しけは山さるあれいまみをせといね

所小文をくらべ〇おとのひくゝ
ものゝ我をの文へなんたゝ
我乃時右れむまの乃人なる宣ほ人を
つゆ知ぬておりほしけ乃時世へくらい
しゑなるもに乃れて我ゆ人乃名わをしか
宣乃かるの孫んとろにもせくはきをの
これ乃つやまとうゝかるを乃ゝ今
かりをほかゝ乃なきされかきぬん
乃さゝたとよおをゝ乃しその本乃
ゝとよおりのて枝をゝてかさゝり

けゝてかゝなるもも乃れかのゝみゝ乃
むまの乃人なる宣ほ人をわほ
世中にゆえて橘なる乃せは
たゝほのゝてゝ乃れときゝゝほ
これんよゝくゝ乃きほ人乃ゝ
ち知をこゝういとゝ橘ゆてゝれ
ゝき世にるにゝのひさゝゝれゝき
ゝて我の本れをとゝたちてゝ乃日
くれよゆあれこもるほ人さけををさせ
て乃ゝゝいてきゝゝとゝのさきをのこてん

中てよ紅葉をとゝ炎りゆくまはゆはの
とゝ海所よりとねみこゝ小島のみ野
ときゆいろみこのゝ浦けあかく紅を
かりてあはうはのよりとりゝ小海を題
中てゝ月をさせとゝくまう
けをはかのしまのかをうよみてゝ
まつり宴
かつくしたるゝつる富かん
右今
はなはれのゝよ我をきにゝを
又こ宴をてすたまゝてゝ
志海をさけありつ孫をすまたゝ
まつれ歌れのやて
右今
ゝゝ坊にてゝきゆと見ては
屋とのすをあ歌しとゝ
かりて文ゝ世行ね和文ほま
さけのをれゝてしてあゝのみこ
ゝゝ入ゝ十一日の月をかゝ
をんとを秋いかのしよみうよあれ
右今
あのゝくゝはゝきゝ月のあゝ海
山乃さわきていまゝもあゝん

月こにかたりたてまつりてきあつ孫
後撰 上野 なしなへて雲をたふ〳〵ゆるん
やまのさなくハ月をいふを
むらみなせにかしこ浦ひ〳〵れ数か
乃月こきいろかりしにおて〳〵浦を
ことふしもしされう月ゆ乃たきれつ〳〵浦
つれ月日さ人へと文よりおへりたまう
けあれなりて〳〵くいろ合ちりた
ねをきあまいろくくゆゆとてたの
いさ〳〵あくこれむしまのうえいもとなりて

浦〳〵やて東ひさ結よ事を世
秋の夜とふたのまれなくに
とよみ侍時を屏ふ侍ひたこもなな
月くろみこ月ことのなりてあ〳〵行て
きあかく〳〵つ浦てけ〳〵浦つりけ
なれをいろなれくしちろ〳〵なまう
てくろむ月はおうみあてまつんとて
小野はは浦てゆよいそれ山乃ゆと
夏は言いとたう志ゆてこひろは浦
てゆうみさてまつれよつをくやいとあ

かなしくておたしほけさはやいさ
ちくはつふくいかに〳〵乃ことをいろ〳〵て
ゆうえんさてをさつ〳〵しいてしるのとお
をへやをあはやきこゝろもをさしかえさ
ふ〳〵ていはてしれぬかほとて

六六

わをしてををのとをとををしきや

六七

ををぬみわきて見をあんとは
こてれんなくくきは汁ろ
むしかとこ有きをあいやるの〳〵
をくをんをなりをの母をのをを

いはゆ所はすあ紅きをと子をを京はををた
のへしけをはまをたこしをれとをいく
えはをうてををりこをさ〳〵ありけ独を
いとかををうををたををしきりををはををい
ををふををあ乃事をとてはををありわ
とをきてみをは奇乃ア

六八

おいねをはさ〳〵ねをを独乃ありといい
いよ〳〵ア海ゆくかしき君のあ

六九

かをこををうををるきてよあ
世中はををけ〳〵ねををれをあをくをものを

千くさをとゝのふる人のこゝろ先
むしろおとこ有事とわゝいふもつゝ
つゝみなきこゝろくしもろしたまうて
きゝむ月はそかるゝまうてゝ有
や事乃こゝやたゝしけをはつ秋はいえま
てもされとそもの心うをなてゆうて
ゝ海はれ人あり事ろむしうはゝ海川
ア人人をくれるせ人ゝなあまくま
いりあつまりて月みれさとつて
月をきたまいきア事こはとのたゝて

ありていれもすはやまは見れ人ゝをいく
言にありこゝれゝとゝふを顕出て事
あり事ア
なゝとも方をゝわゝねゝわゝれをゝ
古今 言はたゝはゝわゝのゝてゝろなす
をよ夫ア名れをみこゝをゝさうあいき
りたまうて市ゝうねさゝ海をゝ
むゝいとわのきゝとこゝろき女をあい
いりけをのくなゝやゝのゝれいつゝみ
ていさゝて屋をいゝゝ比へゝ女の

をとよれいはけてたくさんとやふくを
おもひこ辛をとよみてやをりけり
今海てはわををねへをせにもあし
新古今
をのの浦さくくもの乃へねをは
やてやをにきりおとこも女もあをを
をねをはけるへよみすんいてよを海
むりおもこ津乃くふむりおこを
海しやの里よ志海ふしていき
をみきを里むりおらよ
新古今
おしおを乃ををよをやきいとまを
はきのををしをとさくはきに
やをよみをはをこおをさとはるを見れま
おををおんおしやおをやをとをいををおこの
おとこを海をつへしけをおをおをたを
里にを海ふをけをおつまをきを
これおとこおをのををも志ぬ乃ををなりけ
里おを乃家乃ま乃へ乃海のをとにおを
ひをのをきていをこの山乃かをまを里や
いぬねのしを乃海乃をへをのをんといを
おをりてみをを我のをきをしをとをを

なのさ二十丈いろさゑまさとなる
いしの門てたゝきねかいたをつゝやゝん
やうはれん有きなうたきのかゝり
わゝくれおほさちしてさいてゑれ
石あしをのいしのくゝはかるれ
そせうゝしくをれはきれまそこか
ゑりそこなるゝゝゝみれゑきれうゝ
よほをおのゑぬのうゝみまけゝを
我世ゑいゝふのあをうとまうゝ
なみさのさきと川きゝきん

おれしたきまゝをゝ
ねさみをれゝゝをあるゝし白金乃
まなくゝちろゝの神乃せさきは
いゝをゝけゝをはかゝゝゝ乃わゝゝさとゝを
をゝゝこのゝゝまゝてゝ屋をゝゝゝ乃
ゝくゝをゝちゝをくてゝうせゝ文門てまち
ゝゝの家のまゝくゝをゝゝ月くねやゝゝ
乃かゝをゝをはゝまのいゝゝ火ゝゝく乃
ゝゝゝのゝれゝのかゝこゝを
ゝゝゝゝゝゝゝの河をゝゝゝゝを

わつもむうるのなさくゝ大の
やとみて家よかゝりきねきは夜南の
風やきて涼いとたうつとあてそはあ
のことをいてゝうきみつのなす人はくせ
ら拾ひあれいろひく家の門ゝとてきね
女のくゝ戸をのみ涙をたつきにはりく
かしたはたいくいさしろかしたい
うきを

わつ川海のかさしきはとゝすす
元のさ矢よはおゝ涙さアけア

井なの人はこのにくゝあまをもつたあ
せうしいはわつきよはあゝねも絞れはも
たちこもあはまりて月をのくそれの
なうふいとを

たなつ川月をもあてゝこれをたの
春
はまきは人のかいとなるもの

むゝいやゝのねねとこ我ゝいまさ
アゝつ人をいるかきくを（宣れ
人ちはひるのちはあちきなく
いつまの神よなたなりもん

むつまじきひとびとをいとなみてとりあつめたる
ふるさとのはなとやうやうさきはじめいあす
をのちまでもとゝりけるをかきつけ
くらべしくみうりうりとれいれも
ちりうせぬさくらよつきく
はくるゝもをかくとまりとらんとを
あれこのをうらあをれ来ぬこと
こいぬいをもなりへ
むつ月はゆくをさへるをくること
三月はこゝもとうり

後撰　たゝぬとをきゝかきしれるあれ
ゆくれはなはなはなのれ
むつちりさるきつゝう（注）と女に
せう我こをさにえせくよめれ
あくたなるしと舟つくきい
ゆきかへるゝんちはへをなみ
むつたとこ身のやしくていとホ
るれへをいかきいとうをすこなの
こねをきはるまやをきんかてあい
おきてなのいろるわいくよ夜れ

あれくるしいをすべしなくて
たのきいをしさくるりうあくの
せうをかぶる事は世のひとたるや
あり方人
ひとりおとこ有りていつてりきんその
おとこすまひなりとのちまおとこ
ゑゑれとこのうちすのりけまは海うは
こそあ〜神とどきくあいをこ海くの
女うしようたうく人なりけとはかきう
やもとけをを海りおとこそのをとて

ひとりぬつのをこせさうとかのおやこ
いとはしくをのきこゆれ事をい今海
てたまりはおとてあとなる
人をはうしみはへきあるんありけま
やてりうしてよみくやをあを海い
れよを受をりうを海
なりの和い美日りをゆくあるを海や
かをあ小きうとやちへ海ろうん
ひとりの女やし
チしれれいとりりまをむうい海や

をみちをなをこすふくそちれ
むし二除の伝り伝ったもうつ おとこ
をくの女はたのうまつをはゆよ人うハ
してをさわるけ月いってあるしま
多い男人ってたなつのみくに宿つあを
伊事すこしをのさんといい宿れて
女いをたのいくをのおしふたのいまき
月をのくをるとしてねとこ
をこりまたいを後さりあ後ゆ
魚はを世界をいまいやめてよ

こうちのにめてくのいしをを
むしおとこ有をを女をこうくいるす
月日へおくりいを本にしのし称を
伊しくやいきんやらくあれと学
くりを我のちの月月のをちをを
なりをれ女月におさひとつやさり
いてきにくり女いををこせ多伊今を
何はいをるし月にかさもひとりふさつ
いてを女を時をいとあはしすもし村風
ものきたちをん時かるくあをすをとい歪

アさましかりしまゝかくこゝろを
おもひつゝをとゝいるんをたゞやすてくをば
いてきに宣しらはつるれい女はせうとにた
うよむゝへはきうちはこの女かえて
ろとつをみちをひろをせくうをよみ
てかきけるをこさせて
妹かきくいはしなゝをのゝなくに
本はをりしくえにしをえられ
こかさをしくかしこをこゝをとこ坊は
おもをやをとをていねさて屋うをもちた

ゆまゝ夜てをしくてやうゝあり
くてやあゝをいゝ中をちはかのをこ
をのまをさうてをくちてなんのろはを
ぬをするしたるきこと人ををろをこと
はかをものをやうゝむをねをすやあ
むい夜こうゝ人をとをいねをする
をこうゝ（昭宣公奏状 貞観十七年十月廿五日奏状ナカルベシ）ろかをかをしんまくちきみと
ゆゝいまをうゝ（貞観十七年）六十の賀九陳ろ
家をて世ゝ礼をを月中将なり申ろ
おきれ　業平十九年任中将不審

はくらもちりのはなにまれしおいしく見
あんやいぬなするみちぬうふかり

忠仁公 天安元年二月十九日太政大臣 五十五 貞観十四年九月二日薨
二年十一月摂政 清和外祖

むかしたかきおほいまうちきみときこえ
ゆかりしけるつかへまつるおとこの月
もうしよむ見れはよきえたを
はきてたてまつりして

古今 太政大臣 忠仁公
わかこの世君かさかにとねる花を
ときしもわかぬものにそありける
やよみてまつりたりけれはいと
いとし

おくたかしのやなきて彼ふかくたまへりしを
むかし右近の馬場のひをりの日むかひ
にたてたりける車に女のかほのしたすた
れよりほのかに見えけれは中将なりける
おとこよみてやりける 業平 貞観六年三月 左近少将 十九年正月右中将
見すもあらす見もせぬ人のこひしくは
古今 あやなくけふやなかめくらさむ
返し
しるしらぬなにかあやなくわきていはむ
おもひのみこそしるへなりけれ

せちゑのぬれとをとりにくと
むしろおとこ後涼殿のさぶらひまさやす
アムをはわがやしとあれつるを
ようわをれくさをとをけさとやいまとく
いふさせるさへりけをはいかりて
三条おほいまうちぎみとをみはらをと
こゑをとがなりぬちとたのまを
むしたる兵衛督なりけく在原ゆき
ひらといあり有りけるを我をの人の家にをき
さけわりときこえてうへまをけるを左中弁

藤原良近見親十二年正月右中弁十六年轉左中弁
ちとくしたはさちのとしをなんまうう
ここねをして我の月ありしはるをもとを
けるるさけわがへすてかえるを花をさきを
我乃むものるのふかの春をきぬちれ花ある
けるたのをを三尺六寸ばかりなりけ
それを見やくよ母をうんてをくあり
乃をしのしれるかをしたるまをときて
きをのををををを二人くくををををと
をを二年ばかりをを三ばかりををはすを
くををと三年ばかりをををををかくれん

いく重の志ゝまかゝる人なれ
あるしにまさる所なのうけを
なすやかくしをゝ事をといえそれなれ者
なとゝれ志い花乃さとりはいまそもて
藤氏乃ことゝ志ゝの物をすいさくあ
ゆとなんいひ宣ふ人れゝしゝす
なりふけり
むしなとこ有ゝてゝらいを陽さり
きれと世界をおもひ志りゝとりあ
てなす女れあはなりて世界を見
うんして京まもゝのゝをゝ所の義
山さやまなすみ宣ゝをゝ志そくなすり
けきはよみゝく屋り宣けり
れしゝとて宣まよいのゝあるゝ流と
世のうれとそゝ我にな所てよ
これんいひ屋り宣所舞文の言也
むしなとこ有ゝいとはあるよ志ち
ようにくゝ所ゝ所ゝるゝ所ゝ所ゝ者
乃みゝやまなんれゝゝ所て宣所心
ゝゝやまゝゝやゝゝ宣んみこ宣れゝの

いとおしけなる人をあい愛するとさて
おのれ夏花夏をたうみ給ふあい
おやたちのもとにおされうれ
いとなんとみて夏ゝ宝物さまらうゝ宝
きゝみけさよ
むしゝとゆるゝ事なくてあはり
なまぢ人をゝかいちを夏つしゝ
れとおやゆしかゝ手賀茂のまつ
夏夏よいてゝ夏はけ夏をれゝこう夏
よみくやは

世ゝうゝあはゝこゝ人をみゝゝに
めくいせゝとゝたのまゝかれ
古花ゝ舞ゝ夏花あ夏花い宝夏車よ
かくゆえゝゝゝゝれゝ夏花てかり
花よゝゝとゝ人
むしゝなゝこかゝてゝゝ夏ゝゝゝゝ
夏ゝゝゝ夏けゝは安
白家いきゝゝゝ宝ゝ人ゝ宝夏て
ゝよねくゝさゝ人ゝもあゝゝを
こゝゝりけゝいゝとゝゝあゝゝとゝゝ宝れゝ

いけにさいやはさうとを
むりなとこみこたちはをうえうとをふ
ゐよはらうてゝたつゝ河のうちよて
ちもやもはは祇やはもきのは高河
かゝくれもて井よあくゝはとを
むりあてなるれとこえゝとうれ
おとこはをゆをすけゝ人を門記り
あは宝はもはいゝはやしゆきと海
人よはいゝとさはわのゝれて山を
おさゝくしゝうはとをもいはこゝは

いえんやゝいなはさうとをはかの西
をはゝあんをかきてかゝせゝをはとを
あてはとひまゝとさておとこはあは
はをゝくはなるあはをはさはあゝ川
神のをしちてあををしもを
をゝれいのおとこ女はかをして
のさをこそ神をひつゝ夜をこ海
身はゝなゝれはきゝはをのまを
やゝいゝりはをいおとこいとゝいうめてと
まてはきてゝこゝはをゝはとをん

いぬなるおとこみをこせてうえとまち
はるやまやまのあれのあるかりねへきよるの人びわ
つゝいはるみさいとあゝいこれあるぬ
らしといへりそれはいろのおとこをんな
まかさりてよみて屏風を
かをくるはしおもしいをこいうみ
方をこれあるやうそはされち
こゝをみて屏風をそれいはんのもかさを
とりのつくちゝにねとくはをいきに
宣旨

むし女人のいをうゝみく
風ふきはこいは渡こす岩なをや
ほのさりてのかとく附
やつ孫のとくはいはをはをあい
老はおとこ
ふいをとまかたはのあまゝ雨は
水こゝはされあいゝ孫と
むしおとこ交さちれ人をうなは
かをとゝやや宣はは
花宣も人ゝうゝ及にれ

いつまでさきにたい人せの人
むつまじくこみそのかから女をはな
ぎしのもとにこしかりかの人みえ
たまいたりといへりそもそもとこ
ろいのまいてかしもあれなる事
ぬくみえいきはひしをよ
むつまじくこやむことなる女もとり
なくるりよけるをとかしぬやうにく
いしあるかれ
いかへのあるやせん今をもる

まうえぬ人をもりかをものとを
ゆ
後撰 たいしもろたちとすもとけるよ
かりかのことをいもをたるなき
又ゆ
こをとはさくもいをしたの級
後撰 こ老んをへをまれとたしるん
むつまじくこ神人をあるよいちきりけ
男女をとはさるなりかをは
六ウ をはるあはるこををいこ

なもいねがいまたるいきてけり
むしろおとこなるもわかくなて
なすこなねのちれなとよわをはく
いかふ刀しのきさく後なすらん
或本云有之云々多本皆載之不注之
すさし仁和の刀んかやせ河よ行幸志
はきの時いまいさめ事にきるくられ
やをもてきは宣旨事なれをはの
乃たくいかくしくしくしまい宣れ
をもてきねのたとかさつきろ
後撰 おきれさい人るこころあれかりをんを

ふさうとそたつもなくはろ
おなやあれ宣しきあるけりをのの
くいをもくれわるらな人をきあい
くらわや
むしろみちのくふてなとこ女をみて
おとこえやこへいをんといねこれ女いとかな
しうてむ海乃もれむきをさませんとて
をきの外てこやたこ海といあ下あてさけ
のませくよ伏海
歌 左のみて身をくるを中に

きこしめしてわの殿なりけり
むすめをこすろまみちのくに
てはといいまうす京まれる人の
いもうとめ
拾遺 宿るとも見えぬ水にさし
万葉 いさきい
なかれ事とはれしくなりぬ水宜り
やるんいもうとはきば
むすめをすゑにけり事し
はいりて

古今 我をもいさしくなみとみるうら
新古今 きしもしら波 松いく世ねしを
わかれ事きやうし行こま
むつまじと思ふ川のきよ
新古今 いさ山は世もいさしあてき
むすめとこいさしをとをせくわを
ほゝゑみまし波いりたんといり宜れて
古今 むつまじ本波まさるねまい
拾遺 世えねてろ松し者もす
をうし女はゝなるおとこのうえとて

をたゝ[illegible]ともを人く

[illegible]かゝ人てを今おもはこれなくの

わをもく時をたゝ[illegible]ものな

むしたとこ女のまゝ世へとなまえ

[illegible]の人のたをとゝ[illegible]たのしくわやう

ておちかとへく

[illegible]あゝをもはくまれまちこくせ世

[illegible]つをなき人へるへ乃かを人人

むしたとこ梅童[illegible]ねまく人

[illegible]いつれを乃く

うくいをれたなをねゝてぬかさもれ

ねゝあれへよきせくかへさせ

也

寓乃むをあゝてあかさいる

れをつきよかてうへさん

むしたとこちきゝ[illegible]事あやまれ

人乃

山ゝ乃れ井てのゝ[illegible]ゝてゝ[illegible]ゝ

新古今

さのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ世[illegible]

わといをやゝといくへをゝ

さうたとこ有りぬの事にをみなへ
女を屋しくあきうふまやとろきんかろ
ものをまんと

琴　魚へくすみたし里を出くいなき
いとゝ姫の事船とやすりをん

女房

野ごすゝいろとりて笛をん
琴　かりまさにやさ思いこゝさゝ事
ごとやけつまめてゝ山寺と思なく
なりぬ宮と

むしたやこいの為宮所事を思ひ
宮所ものの小のよ物所
なるまさそそにやそね夏者
我とひとし弘へしなるした
さうおとこわつゝいくゝちねへを
なはをけきは
琴　ゆまゆく道とあるくきしのと
きよぬ宮姫とはなまいさをを

葉平朝臣　三品弾正尹　平城天皇六子　母伊豆内親王桓武第八皇女母藤原乙叡女　阿保親王五男

年月日任右近将監

承和十四年正月補蔵人　嘉祥二年正月

七日従五位下貞観元年正月七日従五位上

五年二月十日右兵衛佐六年三月八日

右近少将七月三日九日右馬権頭十一年正

月七日正五位下十五年正月七日従四位下元

慶元年正月十五日右近権中将十月廿一

日従四位上三年正月十一日相模権守三年

十月蔵人頭四年正月十日美濃権守

同年六月十八日卒

親王　平城天皇第三女正五位下春良藤継子

承和九年十月薨贈一品

行平　卿ノ　阿保親王一男

天長三年　仲平行平　守平　行平ノ　葉平　陽性　在京朝臣

承和七年正月蔵人十二月辞退廿日従

五下廿四年二月侍従十三年正月従五上任

右兵衛佐五月右近少将仁寿三年正五下

兼衛二年正月従四位下備中守元年兼大宰

天安二年二月中務大輔正月左馬頭
三年正月播磨守貞觀二年六月内匠
頭八月廿六日左京大夫正月信濃守
同月従四上五年二月大蔵大輔六年
正月十六日備前権守三月八月兼左兵
衛督八年正月正四下十年五月兼修理
貞觀十二年二月十三日参議五十三廿六日
左兵衛督八月廿一日蔵人頭十四年左兵衛督
十月十六日別當十五年従三位太宰帥元慶
元年治部卿六年正月中納言 六十五 八年正三位
民部卿仁和元年按察仁和三年正月十三日
致仕寛平五年薨

紀有常

承和十一年正月十一日右兵衛大尉叙樂
三年正月二日左近将監四月蔵人九月十
七日兼近江掾大極仁壽元年七月廿六日
兼左馬助十一月中旬従五位下二年二月
廿八日兼但馬介三年正月十六日右兵衛
佐四年正月十六日兼讃岐介右兵衛
佐同年正月従五位上同十五日左近少
将衛二年正月従五位上同十五日左近少
将天安元年九月廿七日兼少納言二年
二月五日兼肥後掾守貞觀七年三月九日
任刑部權大輔九年二月十一日任下野權

守十五年正月七日正五下十七年二月十七
日任雅楽頭十八年正月七日従四位下十九
年正月廿三日卒　年六十三

二條后　中納言右衛督贈太政大臣長良女
母紀伊守　細継女

貞観元年十月廿日従五位下五日叙
矢釈八年十二月女御宣旨九年正月八日
正五位下貞観十年十二月廿六日生第一皇
子　十七　帝年十九　十一年二月立為皇太子十
三年正月八日後三位元慶元年正月三日
昇位日立為中宮　廿六　六年二月七日為
皇太后宮寛平八年九月廿一日停
后位延喜十年十二月薨　六十九　天慶
六年閏月追復后位

河原左大臣融　従嵯峨第十二源氏

承和五年十一月廿七日正四位下元服日　六
年因正月七日侍従八年正月相模守九
年九月己酉近江守十五年二月右近中将兼
美作守　従　和祥三年正月七日従三位五月
右衛門督仁寿四年八月兼伊勢守斎衡三
九月任参議右衛門督伊勢守如元

るゝ〳〵なく

万葉集第十八

かしこきかことよなきもゝしきを
はしるはしるはゝそのかけをとゝ
六帖

いにはえるはぎのくさかえはなさく
よもぎやゝ多れやどにぬれもなし

宋玉神女賦

素質幹之醲實兮志解表而體閑
曹子建洛神賦
瓌姿艷逸儀靜體閑

[illegible]
[illegible]
[illegible]

天福二年正月廿日己未申
刻凌乗門之宵月連日風
雪[illegible]逐此書写為授鍾
也之孫女也
同廿二日授了

別本奥書

合多本所用捨也可備證本
近代以特使事爲端しかも出来
末代しへしに業也文不可用之此
物語古人之説不同或稱在中將
し自書或稱伊勢し筆作就彼
世有書落反本古之人強不可
尋無作者只可號詞花言葉而已

戸部尚書判

又別本奥書

抑伊勢物語根源古人説〻不同
或云在原中將自記云〻因話有其
連退氏興之刑部又云伊勢筆作
或云廿五年也十三幼書之似彼家集文躰是故
号伊勢物語以此両説案之文雖
迄之心中秘密身上興言他人推
而難注之以之可謂其月書欲但
疑萬葉古風之中多載撰集哥
仁和聖日之間粗記除書〻儀此等

事又不審伊勢家集其端文躰
偏以同之是又見光遠舊記房雄
甚林欲反不切之加之此物語若宗
彼筆者何称伊勢乎或説云為
將使下向伊勢仍有此名其説又非
信始載南京春日之詞次又注西
對夜月〻思富士山〻雪武蔵野〻
烟凡非伊勢國事多以為此物語〻
肝心仍反説共有不審古度只仰而
可信又或説後人以將使事汲為

此草子ハ端ハ竹伊勢物語ノ道
理也件本猥籍奇怪者也伊勢所
為ハ不用之
先年所書ノ本為人被借失
仍為備證本重所授合也
戸部尚書判